

氏名	泉屋 咲月 (いずみや さつき)
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	甲第600号
学位授与年月日	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	平安朝物語文学における賛美表現—「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」を軸に
審査委員	(主査) 井野 葉子 (立教大学大学院文学研究科教授) 加藤 睦 (立教大学名誉教授) 小嶋 菜温子 (立正大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序

第一部 『源氏物語』以前の賛美表現

第一章 平安朝物語文学における賛美表現の予備的考察

第二章 『うつほ物語』における「たぐひなし」—俗世の賛美

第三章 『うつほ物語』における「ことなし」「こともなし」—完全無欠の美

第二部 『源氏物語』における賛美表現

第四章 光源氏にとっての「たぐひなし」—紫の上へのまなざし—

第五章 『源氏物語』における「たぐひなし」

—光源氏にとっての「たぐひなし」の独自性—

第六章 『源氏物語』における「ありがたし」

第七章 『源氏物語』若菜巻における「ありがたし」—紫の上賛美をめぐる—

第八章 紫の上賛美に関する一考察—「たぐひなし」から「ありがたし」へ—

結

資料 『源氏物語』における「ありがたし」本文異同

既発表論文との関連

主要参考文献一覧

使用本文一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文は、文脈によって賛美の意味が生じる形容語—「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」—を鍵語として、平安朝物語文学の賛美表現の一端を明らかにするものである。「ことなし」「こともなし」は「特別なことがないさま」が原義で、「たぐひなし」は「比べられるものがないほどであるさま」が原義、「ありがたし」は「存在しにくいさま」が原義であるが、これらの語は文脈によって賛美表現となる。しかし、賛美表現になったとしても原義が失われているわけではないので、本論文では原義をも重要視して考察を行なっている。第一部では『うつほ物語』を取り上げ、『うつほ物語』の「たぐひなし」や「ことなし」「こともなし」という賛美表現の特質を考察している。第二部では『源氏物語』を取り上げ、物語全体における「たぐひなし」と「ありがたし」の全用例を調査した上で、様々な作中人物が様々な作中人物を「たぐひなし」「ありがたし」と賛美する有り様を析出している。これらの分析を通して、『うつほ物語』と『源氏物語』それぞれの、誰が何を美と捉えるのかという美意識や、誰がどのような言葉を使って賛美するのかという言語感覚を深く追究している。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」という言葉を鍵語として平安朝物語文学の賛美表現の有り様を明らかにするものである。作品における全用例を調査した上で、誰が何をどのような言葉を使って賛美しているのかを詳細に検討し、その賛美表現の持つ深い意味を探究している。『うつほ物語』については、「たぐひなし」という賛美表現が貴族社会の現実的な俗世を生きる理想的な人間の美質を語る言葉であること、『うつほ物語』以外の作品では賛美表現にはならない「ことなし」「こともなし」が『うつほ物語』ではそのほとんどが賛美表現になることを明らかにしている。『源氏物語』については、本来は唯一無二のものに用いるはずの「たぐひなし」を光源氏が藤壺と紫の上という二人の人物に用いるところに光源氏独特の〈ゆかり〉の感覚が表れていること、若菜巻において存在の困難さを表す「ありがたし」の語がちりばめられている中で「ありがたし」という紫の上賛美が繰り返されることによって紫の上の立場や命の危うさが浮き彫りになること、また、光源氏が紫の上を賛美する表現が「たぐひなし」から「ありがたし」へと移行していくことは、紫の上を藤壺の〈ゆかり〉として見ることからの脱却であり、光源氏の観念が紫の上の虚像を作り上げていくことであると考察している。

(2) 論文の評価

まず、『うつほ物語』における「たぐひなし」が貴族社会の現実的な俗世の理想的人物を賛美する言葉であることを析出したのは説得力があり、従来誰に対する賛美なのか不明だった「たぐひなし」について仲忠に対する賛美であるという新説を提示したのは意義深い。また、『うつほ物語』以外の作品においては賛美表現ではない「ことなし」「こともなし」が『うつほ物語』においては賛美表現として使われていることを明らかにした功績も大きい。光源氏が藤壺を観念的に「たぐひなし」と思い、紫の上を視覚的に「たぐひなし」と見ることが、藤壺に対する憧憬を紫の上を重ね合わせる行為であることを浮き彫りにしたのも高く評価できる。また、若菜巻において光源氏や明石の君が紫の上を「ありがたし」と賛美する時、紫の上の立場や命などの存在そのものの困難さが暴かれてしまうという第七章、光源氏の紫の上賛美の表現が「たぐひなし」から「ありがたし」へと移行していくという第八章は秀逸である。資料として『源氏物語』の「ありがたし」の全用例と本文異同を載せているのも信頼度を高めている。その際、「ありがたし」の前後のテキストの本文異同をも載せていることは特筆すべきことである。今後の課題としては、さらに他作品に対象を広げたり、鍵語を増やしたりして、より広範囲な研究をすることが挙げられよう。

以上の理由から、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。